近藤益雄の学校外（自宅）での教育に関する一考察

益雄の妻・近藤えい子『厨にありて―教師の妻の手記』1941 年の分析

船橋秀彦
（福祉型専攻科シャンティつくば）

KEY WORDS: 近藤益雄　近藤えい子　学校と自宅

1　研究の目的･方法

近藤益雄(1907～64)は，第二次世界大戦前，生活綴方や児童生活詩の実践をした教師で，戦後は小学校長職を辞し，知的障害児の特殊学級を創設（1950 年）し担任となる。また，自宅に知的障害児のための「のぎく寮」を開設（1953 年）し，学校と施設と 24 時間の生活教育に家族(妻・えい子他)と共に打ち込んだ人物である(1)。

本稿は，益雄の妻・えい子が著した『厨にありて―教師の妻の手記』1941 年(2)(以下，『手記』)の分析によって，益雄の教え子等との学校外(主に自宅)でのかかわりを明らかにする。それは，学校教育(特殊学級での教育)から 24 時間の生活教育(のぎく寮)に到る必然性を探るためである。

2　『厨にありて―教師の妻の手記』1941 年について

近藤えい子(1910～81)は，1927 年に益雄と結婚し，1941 年に『手記』を著した。書名の厨(くりや)とは，台所(3)の意味。『手記』は 3 部構成(教師の妻として，育児記録抄，父の仕事と子供達)で，本稿では「教師の妻として」を，自宅での子どもとの教育的関係との視点から分析する。

3　益雄の家族と子どもとのかかわり

「教師の妻として」(pp. 3－78)には，1941 年までの家庭での様子が描かれ，益雄の 4 校での教員生活に重なる(4)。

■上志佐村尋常高等小学校(28 年 5 月～31 年 8 月)pp. 3－26

家は学校の近くの家の隠居部屋を借り，生まれたばかりの長男(耿，28 年 2 月)と 3 人で住んだ。3 年 3 カ月間在職し，尋常科 4，6 学年と高等科を担任した。

・来訪児：「学校かへりの子供達や，まだ学校に行かぬ子供達は…すぐ遊びに来るようになった」。えい子は「小さい子供達が遊びに来るままに，…爪を切ってやったり髪をけづつてやったりして遊んで…近所の人からよろこばれ」た。耿が 3 歳の時，「1 年生の子供達にさそわれてひとりで遊びに出た」。子供達が，オタマジャクシなどをとってきた。

・学習：益雄は（高等 2 年）「生徒を二人か三人づつうちに泊まらせ…ていた」「耿と遊んだあと，生徒達は飯臺や机を出してしばらく学校の勉強をしてから，自分の家でのことなど世間話みたいに話していた」

・卒業生：「去年卒業した青年達が時々遊びに来て…泊まって先生のお話をきく」「文集が忘れられず…卒業後つづけて俳句や詩，短歌など作っている者が多かった」

■小値賀尋常高等小学校(31 年 8 月～33 年 3 月)pp. 26－53

平戸から遠く離れた島の学校。「学校の近くの大きな農家を一軒借りた」。次男・原理が誕生(31 年 12 月)。1 年 7 カ月間在職し，31･32 年度とも尋常科第 4 学年男子組を担任。学業成績順の学級編成で，尋常 4 年Ａ組は「劣組」。益雄は，学業成績別学級編成に反対し，廃止された。

・来訪児「子供達は毎日うちへ遊びに来た…爪を切ってやった」「子供達は赤ん坊をめづらしそうに見に来た」「小さなカメの子を…近所の子供が二匹持ってきてくれた」

・学習：「休暇中には勉強の出来ない子供達を集め，一緒に遊んでは勉強を教え…私も子供の親と親しくなった」。

■田平尋常高等小学校(33 年 3 月～35 年 3 月)pp. 53－58

平戸から近い村にある学校。家は村の農家の隠居屋を借りた。2 年間在職し，尋常科 6 年女子（33 年），高等科 1 年男女(34 年)の担任。3 男・汪が誕生(34 年 8 月)し 5 人家族。汪の病気（中耳炎）で，えい子は平戸まで毎日病院通い(9 か月間)し「2 年間田平村にいて何も出来なかった」。

■田助村尋常高等小学(35 年 3 月～41 年 5 月)pp. 58－78

益雄は「田助の先生になったら田助部落に住みたい」と希望したが，反対(病気への対応)され平戸に住んだ。「家から毎日一里程の道を通」った。長女・ヨシ子(36 年 12 月)，次女・協子(41 年 10 月)，三女・晃子(41 年 10 月)が誕生。耿は平戸の小学校へ通った。母・マスを加え 9 人家族。6 年余在職し，尋常科 5･6 年生女子，高等科 1･2 年生男女，尋常科 4 年男子，初等科 5 年男子を担任。えい子は，下宿の中学生の世話をした。

・家庭訪問：「今日は学校へ出ない子供の家へ寄って行く…」「時々主人は学校帰りに家庭訪問をして…」

・来訪児：「受持ちの子供達は平戸へ買い物のついでには必ず遊びに来た」「受持ちの生徒達はいつも遊びに来るので…名前を全部覚え…，妹たちのように親しくなった」

・捜索：「子供を探しに出た，…親類の家へ行っていた。翌日，子どもとお父さんがお礼に来た」「主人は（病気で）学校を休ん（だ）。…子供の足音がし…(いなくなった子)が来ていた。…翌日は友達と二人で遊びに来た。…又翌日は…遊びに来た…さばを二匹さげていた」

・依頼：「卒業間近，よい奉公先をと，子供達の親類や姉という人々がお母さんにつれられて…頼みに来た」

・親交：「親しくなって，高等科の頃は自由に本を借りになど来るようになり，将来のことなども私（えい子）と話すようになった」「高等 1 年で上尾さんが学校をやめる時，…高等 1 年の少女達の発起で送別会を私のうちでした」

4　まとめ

近藤益雄の自宅（学校外）での子どもとの教育的関係についてみると，以下の点がわかった。

①益雄は，学校の近くに住むことを望み，近くに住んだ。
②益雄の自宅に，学校の子どもが遊びに来て親しくなった。
③益雄は，家庭訪問を学校の行き帰りにしていた。
④益雄は，夏休みにできない子どもを集めて教えていた。
⑤益雄は，自宅に泊まらせて勉強を教え，話をきいていた。
⑥卒業生も泊まりに来て，勉強していた。

益雄は戦後，知的障害児と 24 時間生活を共にする教育を始めるが，それにつながる“益雄の戦前の自宅での子どもとの教育的関係”を知り得た。

引用文献

1)清水寛「近藤益雄」(『人物でつづる精神薄弱教育史』pp.248 - 249.1980 年)
2)近藤えい子『厨にありて―教師の妻の手記』(1941 年 6 月，東陽閣，332pp.)。
3)えい子は，自らについて「教育者でもなく台所から一歩も外へ出なかった私」(「生活綴り方とは」『近藤益雄著作集 1』P.331)と記している。
4)清水寛『シリーズ福祉に生きる 57　近藤益雄』2010 年。

(FUNABASHI Hidehiko)